

本症はその名の示すごとく「巨大胃皺襞」であり、胃X線診断に際し、体部大弯側に現出する Zählung (歯牙形成) が異状に巨大像として認められるものである。

すなわち粘膜皺襞像が巨大化することが最大の特徴で、従来の観点からすれば Gastritis hypertrophicans の群に入れてもよいような印象を与える。しかしこれを組織学的所見からみると、上皮細胞は圧迫されて扁平化し、粘液量も減少している。また胃腺は萎縮と共に小窩上皮細胞が不規則に増殖して高度の絨毛状突起形成を行なっているため、「萎縮性過形成胃炎」と称すべきものである。

この際、胃腺における主細胞は最も早く消失、壁細胞は抵抗が強く、長く不変のままに残るといわれる。したがって以上の組織学的所見からは「いわゆる萎縮性胃炎」の中の「特殊のもの」ということができよう。

この高度の絨毛状突起形成はX線像として「巨大胃皺襞」を現出することになり、あたかも「肥厚性胃炎様」の印象を与える。さてこのような症例に遭遇した際、最も重要なことは癌との鑑別、特に粘膜癌との識別である。

Giant Gastric Rugae は本来悪性のものではなく、ほとんど患者に苦痛を与えることなくこの点が本症の特徴であるといわれている一経過するといわれるが、稀には癌性化した粘膜が介在することもあり得るとの報告もあり、このようなX線像を示す被検者に対しては定期的な経過観察と共に諸種の精密検査、特に細胞診を行なう必要がある。

演者は61才の女子に Giant Gastric Rugae と思われる1例を経験したので供覧する。本例は約18年前からの観察例で、当初からその歯牙形成は巨大傾向を示しているが、なんらの自覚的的症状なく経過し、近年高血圧症のため治療を受け、その経過は良好である。胃症状としては「無酸」である他は特別の所見なく、最近の2年余り定期的に観察し得たもので、今後も引き続き経過観察を行なう所存である。

4. 【症例検討会】

新生児の消化管閉鎖

司会 川上 博教授

追って全文を本誌に掲載する。

5. 【綜説】

甲状腺刺激ホルモンの甲状腺外作用

(薬理) 亀井 照子

甲状腺刺激ホルモン (TSH と略す) は甲状腺に作用しそのホルモンの分泌を促進する他に、甲状腺以外に作用して、甲状腺ホルモンの末梢組織への取りこみを、

in vivo および in vitro とともに促進し、さらに脂肪組織からの脂肪動員を高めるものである。

このような TSH の甲状腺外作用は、生理学的にも十分意義がある現象と考えられる。たとえば、寒冷環境で生体の熱産生が高まり、生体は寒冷に適應できるのであるが、その際 TSH が甲状腺機能を促進すると同時に、血中にすでに存在する甲状腺ホルモンの組織移行を速かに高め、さらに脂肪の動員利用を増加させるならば、生体の寒冷適應は一層有効に行なわれると考えられるからである。

吉岡研究奨励金授与式

昭和39年度受賞者 橋本 葉子 (菊地生理)

西島 明子 (中山内科)

昭和38年度受賞者の研究発表

正常児と奇形児における脳脊髄の比較解剖学的組織学的研究

大田 豊・永野 貞子 (解剖)

Androgenic Steroids の作用機序と性・年令との関係

藤井 儔子 (薬理)

6. 正常児と奇形児における脳脊髄の比較解剖学的組織学的研究

(第一解剖) 大田 豊・永野 貞子

当教室では奇形児の中で特に重複奇形児の結合眼、心臓、筋異常、レントゲン像、毛流および頭頂施毛、脳等について報告した。

重複奇形児を対称性と非対称性とに分け、対称性を更に単対称性および複対称性とに分ける。

非対称性または寄生性重複奇形児の1例について報告する。8胎月の女児で、Autosit (すなわち自生体) の右肩甲部から側腹部にかけて、Parasit (すなわち寄生体) が付着している。

寄生体の顔面は単鼻孔、合耳性で、頭部は膨大し、頭蓋冠の骨形成を認めず、外脳水腫を認める。頭蓋底には扁平三角形の脳が存在し、肉眼的には小脳を認めない。頭蓋底に骨形成異常あり、かつまた変形を示す。

自生体は右上肢の短縮および屈曲の他に外形の異常はない。

胸部を開くと、自生体および寄生体に属する2対の胸部内臓が存在し、寄生体のものは發育が悪い。自生体と寄生体の動脈および静脈に吻合を認める。寄生体に脊柱を認めない。腹部においては、横膈膜に限局性ヘルニアが存在する。胆嚢、脾臓、胃、十二指腸と小腸の空腸部